

新聞を活用した探究学習—持続可能な国際社会を考える—

橋本 祥夫(京都文教大学)・小林 未来(京都府立東宇治高等学校)

1. はじめに

2020年度から京都文教大学は宇治市内にある京都府立高校数校と連携し、高大接続の探究学習の協働研究をスタートさせた。研究対象となっている高校と京都文教大学は、いずれも宇治市内にあり、地域が共通している。宇治市を共通エリアとして、そのエリア内で「地域協働型 PBL 探究学習」に関する情報を共有しつつ、日常的に学校支援や地域活動を協働して行うシステムづくりを行っている。本研究の独自性は「地域協働型 PBL 探究学習」を各校の努力のみに任せず、共通エリアで「地域教育システム」をつくりあげていこうとしている点である。本発表では、協働研究をしている京都府立東宇治高等学校の事例を報告する。

2. 「総合的な探究の時間」と NIE との関わり

これからの社会の担い手となる生徒に求められる力は、「自ら社会や地域の中で課題を見つけ、解決のために行動できる」ことである。この力の育成にむけて、本校では「みらいを明るくできる人」を育てるため、「総合的な探究の時間」において1年生より新聞を活用しての探究活動の授業を取り入れている。新聞は、政治・経済から地域ニュース、文化まで幅広い分野の情報を扱っているだけでなく、連載や特集など時間をかけて一つの事柄に向き合うきっかけにもなる媒体である。この特徴を指導者が理解し、生徒が新聞を入口に社会や地域に参画していけるように、授業計画を組んでいる。

3. NIE を通して生徒につけさせたい力

1年生では、地域紙の洛タイ新報を通し、自分たちが暮らしている地域の全体像をつかむとともに、今どのようなことが課題として報道されているかを考える力を育成する。2年生では、1年生をベースに、朝日新聞社が開発した SDG s のプログラムを活用し持続可能な国際社会にむけて高校生という立場からの提言ができる力を育成する。この提言のヒントとなるのもまた、別の新聞記事である。主体的に新聞を読み進めることにより見識が深まっていくことを経験させる。また2年間を通してその記事を記者がなぜ報道しようとしたか、との視点を持たせることにより、課題そのものへの理解を深めるとともに、それらを取り巻く状況にも目を向けさせ広く対象を分析する力を養う。

4. 成果と課題

新聞を活用しての課題発見学習の面白さに気づけるようになったグループが夏休みに実施された NIE 学会(高校生の取組発表)に参加し、他校と実践交流をすることができた。しかし、新聞という身近な「マスメディア」が私たちに示してくれている「情報」を読み解き、課題には気づけてはいるが、そこから他の関連する記事に目を向けたりしながらの探究活動を行う意義を見出しにくい生徒が一定数おり、そこから抜け出るための指導方法について検討する必要がある。